

礼拝

令和7年6月9日
3号



宗教礼拝 音楽法要より

～本校で学んで欲しいこと 讃仏（さんぶつ）～

世の中には多種多様な楽曲があり、自分好みのものがあると思います。メロディーがいい、歌詞の内容に感動した、歌っている人が好き…。なぜその楽曲が好きなのか、などと分析すると、せっかくの良さが半減してしまうこともあるので「好きなものは好き」という理由が最もふさわしいのかもしれない。しかし、詩句の意味を理解することで、より深くその世界に入り込めると思います。毎回の宗教礼拝で音楽法要を行っていますが、歌詞の意味を考えたことはあるでしょうか。今回は「讃仏」から本校で学んでもらいたいことをお伝えしたいと思います。

「讃仏」はもと「日中礼讃」というお経の最初の部分（楽曲でいえば、歌詞の一番に当たる部分）を抜き出したものです。いつもの礼拝では皆で歌っていただきますので、歌詞としての詩句は覚えていきたいと思います。しかし、聖歌集には歌詞としてひらがなで書かれているので、その意味を知ることがなかなか難しい事ではないでしょうか。この詩句を漢文に直すと、次のようになります。

- ① 南無至心帰命礼 西方阿弥陀仏
- ② 弥陀身色如金山 相好光明照十方
- ③ 唯有念仏蒙光摂 当知本願最為強
- ④ 六方如来舒舌証 専称名号至西方
- ⑤ 到彼華開聞妙法 十地願行自然彰
- ⑥ 願共諸衆生 往生安樂国

訳

① 阿弥陀さまを抛りどころとし、身も心もささげて西方浄土の阿弥陀さまを拝みます。
② 阿弥陀さまのお身体は金の山のようにあり、そのお身体から放たれる明るい光はあらゆる世界を照らして下さい。
③ そのみ光を受けて、救って頂けるのは、お念仏を称える者だけです。「私の名を称える者が、もし極楽に生まれないならば、私は覚りを開きません」と誓われた阿弥陀さまは、今現在、極楽世界で覚りを開かれています。かつて誓われた大切

な願は虚しいものではなく、最も勝れていることを知るべきです。

④ あらゆる世界の仏さまたちが、広くて長い舌をお出しになり「ただ阿弥陀さまのお名前を称えるだけで、西方極楽浄土に至る」ということを証明されています。
⑤ そして極楽に到着すると、蓮（はちす）の花が開き、阿弥陀さまの、不思議なほどに優れた説法を聞き、菩薩の修めるべき願いと行いを自ら具えることができるのです。

⑥ 願わくは、多くの人々と共に阿弥陀さまの極楽浄土へ往生できますように。

讃仏の最後の詩句、「共に極楽浄土に往生する」とは、まさに本校の創設者、獅谷佛定（ししたにぶつじょう）上人の創設の願いである「三宝帰依」の仏教精神そのものなのです。つまり、本校で学んで欲しいことは、この学園に集うすべての人が、あらゆる生きとし生けるものとともに、一明るく正しく仲よく「生きていく自分を築き上げ、将来においてもその気持ちを大切に持ち続けていく」という日常の心構えなのです。

今回の礼拝からは、讃仏の歌詞の意味や建学の精神を思い、今まで以上に心を込めて音楽法要を勤めていきましょう。また、その心を以て日々の生活をよりよいものにしていきましょう。